

- 昭 34, 日本地名学研究所『日本歴史地名総索引』2ターワ 昭 55
- 4) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典』11・埼玉県 昭 55
- 5) 田川良・道沢明「茨城県猿島郡三和町二十五里寺(つうへいじ)遺跡の研究」『奈和』昭 50
- 6) 柳田国男「地名の研究」昭 10
- 7) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典』12・千葉県 昭 59
- 8) 洞院公定『尊卑分脈』14 Cの桓武平氏略系図によれば平良文から数えて第 8 代。
- 9) 千葉市教育委員会『千葉市史』3・現代編 昭 49 所収
房総叢書刊行会『改定房総叢書』昭 34 の千葉家関係の系図には通平寺氏の名は見られない。
- 10) 『読史備要』の千葉氏系図によれば平良文から数えて第 25 代。
- 11) 和田茂右衛門『千葉市小字調査』昭 39・「千葉市の町名考」昭 45
この近辺には増田姓の旧家が多い。
- 12) 現在、市原市海保の遍照院学道寺の末寺。真言宗。
- 13) 中村国香『房総志料』宝暦 11 (1961)・千葉県郷土資料刊行会『千葉県地名変遷総覧』昭 47 所収、小沢治郎左衛門『上総國町村誌』上 明 22, 「東泉寺沿革書」昭 11 (遍照院学道寺蔵)
- 14) 石田瑞麿「浄土教の展開」昭 42
- 15) 「東泉寺沿革書」昭 11
- 16) 国立歴史民俗博物館・平川南氏の解説と御教示をいただいた。
至心身楽は信の誤まり。
同銘の金石文には摂津国大念仏寺引接鋤の銘文・永長元年 (1096) (偽作とされている)、埼玉県熊谷市肥塚の板碑銘文・康元二年 (正嘉元年) (1257) などがある。
- 17) これによって、亡者の一切の罪が消されるとされる。
- 18) 圭室諦成「葬式と仏事」『明治大学人文科学研究紀要』1 昭 37・『葬送墓制研究集成』3 昭 54 所収
- 19) 往生要集に引用の十往生経 (偽作とされる) に説く阿弥陀来迎の時に従って来る二十五菩薩もまた浄土教仏事に登場するように、浄土教と二十五という数は関連が多い。
- 20) 柳田国男「葬制の沿革について」『人類学雑誌』44-6 昭 4
- 21) 東泉寺の明治 36 年の記録 (遍照院学道寺蔵) では薬師如来・阿弥陀如来・弘法大師の木像各 1 体と記されている。
- 22) 邊見端「法花坊遺跡の伝説考」『国学院雑誌』84-9 昭 58
- 23) 白石竹雄「研究連絡誌の創刊にあたって」『研究連絡誌』1 昭 57

近世の宝篋印塔

——佐原市観福寺塔, 市原市龍溪寺塔他——

齋 木 勝

昨年 6 月 24 日の朝日新聞『論壇』に県立安房高校の川崎喜久男教諭が「墓石が語る地域の歴史」という内容で投稿されている。すでに『千葉県の歴史』第 19 号に「房総の寺小屋」を発表されていたのでその内容も大変興味深く拝読させて頂いたのでその内容も大変興味深く拝読させて頂いた(註 1)。それは、庶民の祖先の精神生活を知ることのできる石造物史料(墓石など)が撤去され破壊されている現状を憂慮し、筆子塚・取子塚を例にとり、墓地などが整理される場合は調査を義務づけるべきと結んでいる。

このことについては、同じように県下の寺院や墓地を訪ねる者として全く同じ思いである。墓地などで墓石の銘を調べていると怪訝そうに、また、非難したような目を注ぐ人も多いが、各地で荒廃していく墓地の状況を見るにつけ、何とかならないものかと常々感じるものである。

筆者はそのような状況のなかで近世墓地の総合的研究を目指すものであるが、今回の試みは、墓石、供養塔のなかで特に宝篋印塔について、その構造・様式について概略報告するものである。

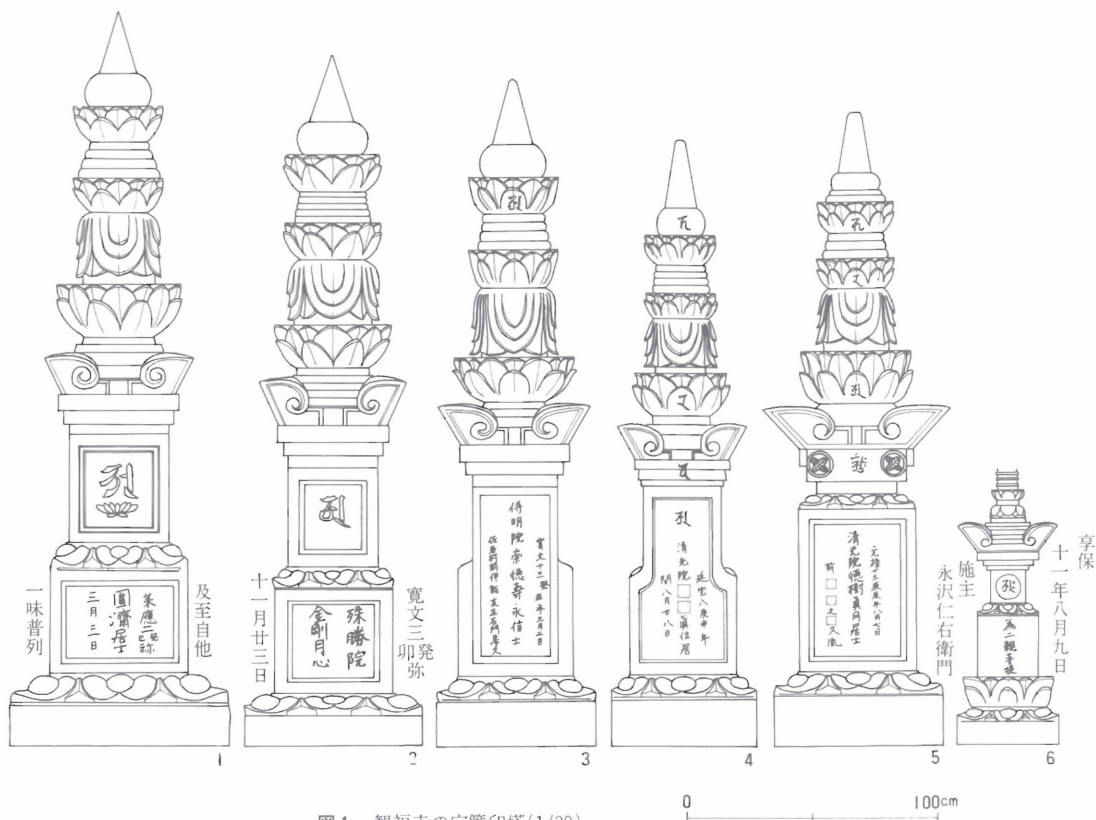


図1 観福寺の宝篋印塔(1/30)

観福寺の宝篋印塔 (図1)

佐原市牧野字谷津にある真言宗の寺院。

寛永以後の石塔で特徴的な点は、相輪部への施工が特に顕著になることである。相輪が請花・九輪・宝珠の先鋒と、それぞれ材を異にする。反花座は単弁を示し、基礎は二重の輪郭を配し、正面には法名などを刻む。段形は反花をつくる。塔身は『ア』の胎藏界大日如来、まれに『ウーン』の金剛界阿門如来を刻む。笠は軒下に垂直の2段形と上部に5段もしくは6段の段形を配する。隅飾は二重の輪郭を有し、内側に巻く。その上面は脹らむものは少なく平坦である。相輪は前述した如く大形化する。

全体が5材あるいは6材によるもので、塔身、基礎を合体した形式がある。3、4はその一形式で下面がやや幅広になる。紀銘は基礎に施されるものと全く同じで、法名、造立年を刻む。反花座は単弁。笠の隅飾は規格化された状態で、上部の段形は4段確認される。相輪は、請花・垂花・請花・数段の断面孤状の九輪・請花・宝珠・先鋒と

刻む。請花に胎藏界大日如来を刻むもの2基、また、宝珠・請花・請花・垂花・請花の各部に『キャ・カ・ラ・バ・ア』の東方発心門を刻むもの3基、同じく南方修行門を刻むもの1基が確認される。

6は相輪の一部を欠する。花崗岩製。反花座上に請座を設けてある点が特異で、いわゆる装飾宝篋印塔の形式である。基礎には願文が刻まれ、上端に反花座を配する。塔身は各面月輪を設け、金剛界四仏種子を刻む。笠は軒下に2段形、上部に7段形を配する。隅飾はかなり外反し、花卉状を呈し輪郭を施す。段形上には相輪を据える。

大慈恩寺の宝篋印塔 (図2, 1)

香取郡大栄町大字吉岡字下町にある真言宗の寺院。

宝篋印塔はすべて重合式で、安山岩製。6ないし7材によるものが5基確認され、そのうち3基までが『キャ・カ・ラ・バ・ア』の東方発心門の五大種子を刻む。ともに基礎・塔身に一重もしくは二重の輪郭をとり、基礎への銘文は中央に法名を刻む。その右側に紀年銘、左側に月日を配する。

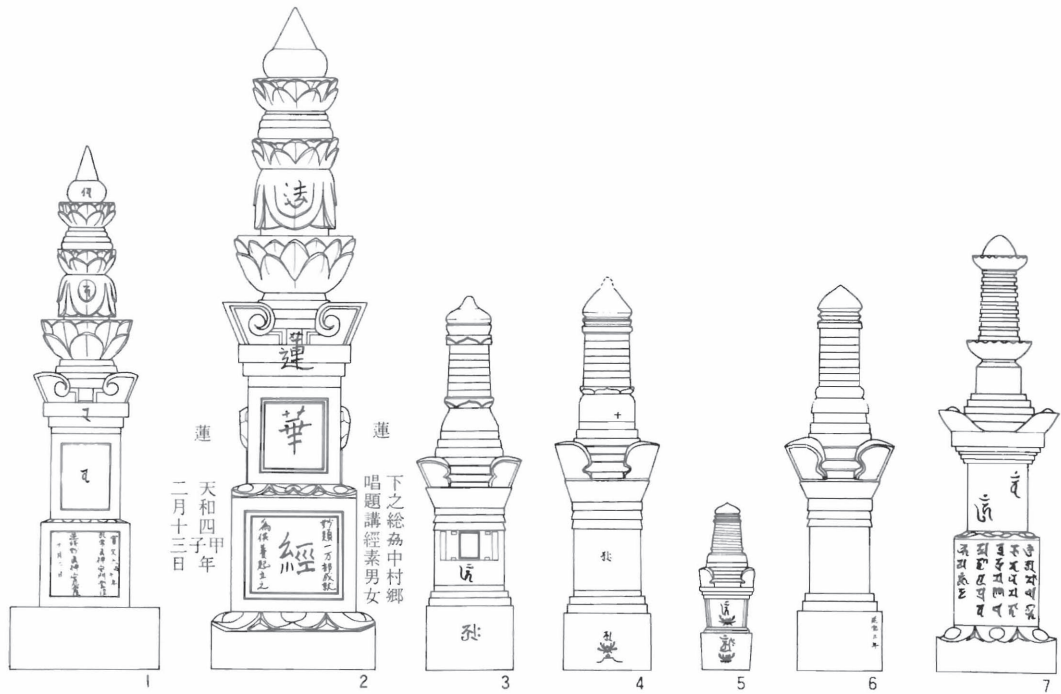


図2 大慈恩寺、西谷墓地、光厳寺、西光寺の宝篋印塔(1/30)

段形は施されず、反花を彫出する。『元禄』、『宝永』紀銘の資料は単弁の反花であるが、第2図1の『寛文』の資料は線刻されている。塔身正面には東方発心門の「水」にあたる『水』を刻むものと、「地」にあたる『地』を刻むものがある。笠は隅飾に施された文様など一様に類似する。上部段形は明瞭な稜はもたず、線刻により表わす。相輪は、請花・垂花・請花・九輪・請花・宝珠の順で刻出される。

西谷墓地の宝篋印塔 (図2, 2)

香取郡多古町南中西谷の中村談林日本寺南の墓地内にある。

延宝2(1674)年、天和4(1684)年、正徳5(1715)年など、4基の宝篋印塔が確認され、すべて重合式で安山岩製である。

2は、基礎の『経』をはさんで願文が割書される。なお、紀年は左面に刻まれる。基礎上に単弁の反花を設け、その上に塔身を据える。塔身正面には『華』を刻み、二重の輪郭を設ける。両側面には、陽刻による蓮が施される。笠は、軒下に2段形、上部に5段形を設ける。隅飾は鋭角的に外傾する。輪郭は二重で内側に巻き、巴状に刻む。

請花は複弁で華飾をきわめる。九輪は変形され、円輪を4段重ねた状態を示す。宝珠は先鋒が円錐形に大形化している。

光厳寺の宝篋印塔 (図2, 3~5)

銚子市松本町にある真言宗の寺院。

3と4は、ともに4材により構成され、並列して建立されている。基礎には胎藏界四仏種子、塔身には金剛界四仏種子を刻む。3の塔身は身部を掘りぬき石祠式にしている。入口は横7.5cm、縦10.7cmで有段の縁取りを有し、左右対称に方形と長方形の溝を刻む。笠の上部段形は7段、相輪の露鉢は円柱状及び円錐状を成し、単弁の請花と6条の線刻による九輪を認める。宝珠は一方が欠損しているがともに乳頭状に尖る。さらに注目される点として、『十』が刻まれていることである。3は露盤の正面やや右側、4は基礎の左面『蓮華座』と配する部分の下部、右面の『蓮華座』の下部、塔身背面の『蓮華座』の下部、及び笠と九輪にも認められた。

一材構成形式の5は、基礎に胎藏界大日如来の『アーク』を刻み、蓮華座を伴う。上端の幅は

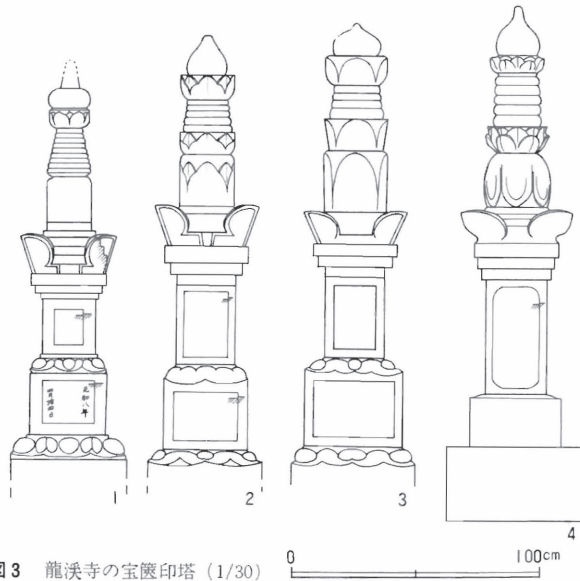


図3 龍溪寺の宝篋印塔 (1/30)

下端に比べ1 cmほど広い。2段の段形上に金剛界四仏種子を刻した塔身があり、正面には『ウーン』を刻み、蓮華座を配す。左右に輪郭を認める。基礎と同様、上端が下端に比べ2 cmほど広い。笠の軒下は2段形で上部は5段形。隅飾は二弧で若干外反する。相輪は全体的に隅丸の四角柱状を呈し、線刻による九輪は螺旋状を示す。この様式は本地域の宝塔にきわめて近似する。

西光寺の宝篋印塔 (図2, 6・7)

八日市場市米倉にある真言宗の寺院。

紀年銘の確認された24基と、無銘の一材構成形式2基を計測した。

6は基礎から相輪まで遺存するが、笠の最上段形と相輪の伏鉢が不整合であることから乱積の一塔であろう。ただ、塔勢をみると下総型の宝篋印塔の形態を示す。

7は、基礎に宝篋印陀羅尼経を刻む。反花座は単弁の反花をつくり、側面は無地。基礎上端はきわめて比高の低い単弁の反花を施す。塔身には金剛界四仏種子を刻み、正面右上には金剛界大日如來の『バン』、左下には『ウーン』を配す。笠は軒下に4段形、軒は垂直に切られ、隅飾も花卉状に外反

する。なお、隅飾の内側には把手を有する。上部段形は5段。相輪の覆鉢は各面無地の四角柱状、頸れを有す。九輪上下の請花は、側面を無地とし、上面を波状に刻み単弁の請花として表わすものと思われる。九輪は幅1.5 cmの溝を刻み表わす。

龍溪寺の宝篋印塔 (図3, 1～4)

市原市石川にある曹洞宗の寺院。

境内本堂の左側に林家墓地(註2)があり、約12基の宝篋印塔が建立されている。紀年銘をみると、元和元(1615)年から文化7(1810)年まで確認される。

掲図した石塔の紀年銘は、1は基礎に『元和八年四月拾四日』、2は塔身に『寛永十五戊寅曆二月中旬二日』、3は基礎に『天和壬戌年七月廿日』、4は塔身に『寛政八丙辰年三月二十七日』と、それぞれ左右に割書している。

すべて重合式で、反花座、基礎、塔身、笠、相輪の5材より成る。1は凝灰岩、他は安山岩である。

反花座は単弁、基礎、塔身は輪郭を巻く。笠は軒下に2段形をもち、上部には1が6段形、2、4は3段形、3は1段形をもち。隅飾2弧で輪郭

をもつ。龍溪寺の宝篋印塔で特徴的なことは相輪部への施工である。長筒形の伏鉢、上端で頸れる九輪、線刻単弁の請花（1）、塔身の幅に近い径をもつ伏鉢、単弁を刻む伏鉢、請花、五輪の九輪（2）、簡略化した単弁を刻む伏鉢、請花、四輪の九輪（3）、全体的に装飾化が進んだ相輪（4）などが注意される。

近世の銘をもった石塔は県下において数限りない。近年、石造文化財の一部は保護の対象になり、各市町村にあっては、その所在調査も行なわれ始めた。道祖神なども民俗的な研究の対象になる昨今であるが、道路工事、宅地造成などで人知れず、廃棄、埋没していく石塔もかなり多いように思われる。

近世の宝篋印塔について論述したものに、管見の知るところでは、横須賀市良心寺の朝倉能登守夫人墓（註3）と、港区三田濟海寺長岡藩主牧野家墓所（註4）の報告がある。前者は江戸初期の宝篋印塔の形式について記しており、後者はそれとともに宝篋印塔の塔下の墓室の発掘調査も報告している。このように近世の墓塔、墓地も考古学研究的対象になり、その調査方法も考古学的手法を用いられるということは大変好ましいことである。

ここに呈示した資料は任意に抽出した石塔で千葉県下に存在する近世宝篋印塔の代表的なものである。これら以外にも、200基以上計測、実測しているが、それらの調査の成果も考慮にいれながら近世宝篋印塔を概観してみたい。

筆者はすでに近世宝篋印塔の出現を安土桃山期の慶長年間とした（註5）。この考えは現在も変りはない。その後の変遷をみると各部様式では寛文年間頃（1611）より、特に塔身、笠に変化がみられ、宝篋印塔形式を踏襲しながらも塔形の変化は著しい。

この変化は、例えば慶安2（1649）年に幕府は高野山に対し石塔場は2間四方を越えてはならないと指示したり、また、天保2（1831）年、墓碑

は台石を含めて4尺（1.2m）と制限されたこと（註6）なども当然影響しているのであろう。

第1図に示した、佐原市観福寺の宝篋印塔は、左より、承応2（1653）年、寛文3（1663）年、寛文13（1673）年、延宝8（1680）年、元禄13（1700）年、享保11（1766）年で新しくなるにしたがい小形化していく様相も偶然ではないのではなかろうか。

以前、構成形式という名称で建立された石塔がはたして何材によって構成されているかをみた（註7）。近世の宝篋印塔はほとんど5材の反花座式（相輪、笠、塔身、基礎、反花座）である。しかし、本尊を示す塔身と基礎が合体した形式が確認され、また、塔が大形化することにより相輪部が1材では不可能になり、宝珠の先鋒、九輪、請花の3材に分材したものや、基礎下面に単独の請座を設けた、6材の請座式が確認された。

今回報告するにあたり、石塔の実測等を心良く許された各寺院、また、長岡藩主牧野家墓所の調査報告書を御恵贈下された港区教育委員会、高山優氏に厚くお礼申し上げます。

（6班・班長）

註

- 1) 川崎喜久男「房総の寺小屋」『千葉県の歴史』第19号 昭55. 2
- 2) 小林康利「龍溪寺境内林家墓標」『さざなみ』第22号 昭56. 7
- 3) 斎藤彦司「朝倉能登守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について」神奈川県立博物館研究報告第1巻第2号 昭44. 3
- 4) 鈴木公雄他『港区三田濟海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査概要』東京都港区教育委員会 昭58. 3
- 5) 拙稿「房総宝篋印塔考」『物質文化』第35号 昭55. 8
- 6) 梶敏夫「墓塔」『日本石仏事典』雄山閣 昭50. 12
- 7) 註5に同じ